

リンゴづくりの貢献者 きくち たてえい とのさきかしち
菊池楯衛と外崎嘉七

日本で、もっとも多くリンゴを生産するのは、わが青森県で、年間やぐ四十九万〜五十万トン。ついで、長野の二十二万〜二十三万トン、以下岩手、秋田、北海道などとなっている（平成八年から十年現在）。

米とならんで、リンゴは青森県の経済を大きくささえてきた。

生産量だけではない——味も色も形もすばらしく、名実ともに日本一の青森リンゴは、生リンゴとしてだけでなく、ジュースやジャム、ブレンドレーや菓子などの加工品としても、生産されている。

ところで、青森県にはじめてリンゴの木がうえられたのは、一八七五年（明治八）のことだから、百二十年あまりも前のことである。

青森県のリンゴが現在のようになり、ひろく栽培されるようになったのは、多くの人たちの努力と研究があったからだが、とくに忘れてならぬ

いのは、菊池楯衛きくち たてえいと外崎嘉七とのさきかしちである。

菊池権衛とリンゴ

菊池は一八四六年（弘化三）、弘前市鷹匠町にすむ、成田滝弥という武士の子として生まれた。（あとで、代官町の菊池家に養子に行っている。）

武士の家に生まれたものの、菊池は、武芸がきらいだった。武芸をするかわり、かくれて、草木ばかりいじくりまわしている、かわった子どもだった。

このことを菊池も、八幼少より農事を好むも、旧藩制において、士分は農を営むのを禁じられているゆえ、ひそかに、植物を栽培せりと、自叙伝にもかいている。

このように、植物を愛好した菊池が、後日リンゴ栽培に情熱をかたむけることになったのも、容易にうなずけることである。

さて、藩制の時代が終わり、明治維新になって数年後——ときの政府の命令で、北海道の農業開拓にたずさわっていた黒田清隆くろだきよたかが、アメリカからさまざまな植物の種子や苗木をとりよせた。その中に、リンゴの苗木もまじっていたのである。とくに、リンゴについては、内務省も力を入れ、全国各府県に苗木をくばって、試験栽培を行なわせることになった。

リンゴの苗木は、青森県庁にもとどいた。

一八七五年（明治八）春のことだが、そのころの県庁には、まだ農事の係はなかった。

苗木を受けとったのは、当時租税課（税務関係のしごとをする課）に、つとめていた菊池楯衛だった。

さつそく苗木を庁舎の庭にうえたが、これがそもそも菊池の一生を、リンゴと結びつけることになったのである。

このときに届いた苗木は、わずか三本だが、同年秋には七十五本、翌年には二百三十本と配布の数がふえてきた。菊池一人では、とても手に負えなくなった。

「これだと、みんなにも協力してもらわなければ…。」

菊池は苗木を県内各所にくばって、栽培させることにした。

こうしてうえたリンゴの木で、最も早く実をつけたのは、弘前市在府町（弘前大学医学部の前庭）にすむ山野茂樹やまの しげきのものだった。紅さきがけとよぶ品種だが、彼は山野早生わかせと名づけた。

菊池もまた、自分の家のうら庭に苗木をうえていたが、やがて赤い実がついた。

「これは——みごとだ。」

自分で手がけたリンゴの木に実がなって、菊池は目を輝かせた。さつそく菊池赤早あかはやと名まえをつけた。（赤早とは、実が赤く、はやい時期

に収かくできるといいうみである。あとでこれに丹頂という名がついた。

然しリンゴを栽培するものがふえるにしたがって、困ることがおこった。

そのころ、稲作や養蚕は政府でも生産に保護を加えていたが、リンゴは自由生産で、よび名にもとくべつなきまりがなく山野早生とか菊池赤早、大道寺中手なかで（後に大中という）とそれぞれ生産者は、かつてに自分の名前をつけるので、まぎらわしくていけなかったからである。

「なんとか、まとまりのあるものにしなければいけない。」

こうして、百種あまりもつけられていたよび名を、国光・紅玉・祝など——品種で、あらわすように統一したのである。

ともかく栽培のけっか、気候や風土からリンゴは青森県に適したものであることがわかった。

一八七七年（明治十）菊池は、北海道開拓の役人として出かけた。

しごとは、函館の周辺をまわって、地理をしらべることだった。が、管内の試験場にアメリカ人の技師がいて、開拓者に園芸技術を教えているのを耳にした。

菊池は、さつそく出かけていった。菊池をおどろかせたのは、高度な果樹栽培の技術がおこなわれていることだった。

すっかり心をうばわれた菊池は、即刻役人をやめ、そのまま研究生として試験場に入ったのである。

ここで学んだのは、揚げ接ぎとよぶ「接ぎ木」の仕方だった。それまでは、果樹に据え接ぎという方法はあったが、それとはくらべものにならぬ程、作業もかんたんで、すぐれた効果のあることもわかった。

菊池はさっそく、弘前に帰って生産者に揚げ接ぎ法を伝えた。生産者のあつまりが、しだいにふえていった。

この時に菊池は、化育社かいくしゃとよぶリンゴ研究のグループを生産者で組織したのである。

菊池は化育社を母体に、苗木を生産することからしごとをはじめた。やがてグループの人たちは、リンゴ栽培の指導者となって県内の農村で活躍するようになる。

「せっかく、外国のリンゴを栽培したのだから、一般消費者に、ひろく宣伝しよう。」

菊池が考えたのは、リンゴの品評会だった。第一回県リンゴ品評会が開かれたのは、一八八四年（明治十七）のことである。

化育社が中心になり、この時の経費は、すべて菊池が引きうけた。

品評会では、参加者にリンゴの試食もおこなった。それが成功した。

「おいしーっ——」

「これがリンゴだって？」

じつは、昔から津軽には、中国原産のリンゴがあった。が、実は小さく酸味が強く渋味があつて、とてもまずいものだった。

しかし、アメリカから取りよせた苗をもとに栽培した新しい品種のリンゴは、これまでのものとは全くちがっていたのである。

てきとうな酸味に、たっぷり甘味があつて、さわやかな味である。色も美しく、実も大きい——みんなは目を見はった。

新しい品種のリンゴは、商品として大きくのびていった。

第一回リンゴ品評会を機会に、化育社は中郡私立農談会と名まえを改めて、菊池が会長におされた。（それ以後、リンゴ品評会は毎年、民間団体に開くようになり現在に至っている。）

△青森リンゴを発展させるには、まず苗木の生産から……▽

菊池が農談会で力をそそいだのは、リンゴの苗木の自給をはかることだった。会員にはたらきかけて、六年間に八万本という大量の苗木を生産した。

苗木は津軽を始め、下北、上北、八戸までひろく供給した。全国一の生産をほこる青森リンゴのきそづくりは、この時に出来たのである。さらに菊池は、私費を投じて後潟園とよぶ園芸センターも設けた。リンゴのほかの植物も栽培し、その研究と普及をはかるのが目的だった。

種類は、果樹が百二十種、花木二百五十八種、林木二十五種、草花や野菜が二百二十三種そのほかをあわせると千種にのぼる大がかりなものだった。菊池は、これらの植物を栽培し、弘前をはじめ広く県内に普及させた。

この中から馬鈴薯、西洋ワサビ、アカシア、生姜しょうがなど——いまも栽培のつづいているものも少なくない。新しい植物を栽培して地方産業を振興させるのが、菊池の理想だった。

だが、私設の園芸センターなので、その実現をはかるのにさまざまな点でさしさわりが生じた。何よりも経費のやりくりがつかなくなったことである。

そのため、菊池の家計はしだいに苦しくなっていた。一八九六年（明治二十九）の、「果物雑誌」という本に、彼は論文をよせ、>新奇に走るは失敗のもとと、自分の体験による失敗をくりかえさぬように、一般農家にもよびかけている。

が、このすばらしい事業を、どうして国や県が見すごしたのか？

しかし、この苦境をすくってくれたのは、リンゴ栽培だった。△その後、リンゴのすぐれた品種を得て、ようやく細々ながらも生活ができるようになった。くと、その当時のことを述べているが、菊池はやはり、卓越したリンゴの栽培者だったのである。

菊池は、郷土のリンゴ栽培に、いつも新しい知識を吹きこみ、生産者を指導しながら一生を終えた。彼が亡くなったのは一九一八年（大正

七)で、七十三歳だった。

青森リンゴが、現在のようひろく栽培されるようになった基礎づくりは、菊池楯衛を中心になされたのであり、その業績をたたえて、弘前市最勝院に頌徳碑が立てられた。

菊池はまた、一八八二年(明治十五)、当時荒れ放題になっていた旧弘前城に「ソメイヨシノ」の苗木千本を植樹した。現在でも幾本か健全であるが、日本一といわれる「弘前公園のさくら」のさきがけとなった人としても、忘れることのできない人である。

栽培に新分野を開いた外崎嘉七

菊池楯衛とともに、青森県リンゴに貢献した外崎嘉七は、菊池とは生いたちもちがう。

嘉七は、小さな農家の出身である。

菊池より十三年後——一八五九年(安政六)、中郡清水村樹木(いまの弘前市)に住む外崎長八の三男として生まれた。大柄で、ぼうようとした菊池にくらべて、嘉七はやせて眼光もするどく、せいかん精悍なかんじをあたえた。

道理に合わないことには、けっして妥協しない一徹さはあったが、納得すると、こころよく人を受け入れる性格で、リンゴづくりたちはみ

な、△樹木のじっちゃ▽とよんで親しんだ。

菊池とおなじように、嘉七もまた、リンゴづくりに一生をかけた人だが、わすれてならないのは、袋かけや、せんでい剪定（枝きり）、病気や害虫を防ぐためのくすりかけなど——さまざま栽培法を開拓したことである。

嘉七は生まれつき、気性のはげしい、負けぬ気をつよい子供だった。

友人や年上のものにも、よく喧嘩をしかけ、相手をやりこめてもどってくる。

「こまったもんだ。喧嘩ばかりして……。」

らんぼうな嘉七のふるまいに、両親はいつもぐちをこぼした。

が、嘉七に同調したのは、本家のおじだった。おじの所では、女の子供ばかりだったためかもしれないが、「かし（嘉七）、男なら、それくらい元気がなくっちゃだめだ。」と、喧嘩したことを逆にほめたてた。

それに気をよくして、嘉七はまた出かけていく……。

だが、こうした粗野な嘉七の人柄を、大きくかえた人がいる。ささもりぎすけ笹森儀助だった。

笹森は、旧津軽藩士の家に生まれたが、明治維新になって武士をやめたひとたちのために、岩木山ろくの常盤野のうぼくしやに農牧社とよぶ農場をひら

いた人である。当時としては、めずらしい洋式の農場だった。

嘉七の人生を変えたのは——彼が、作業員として農牧社に入ったのがきっかけだった。嘉七が、二十四歳のときである。

笹森は、探検家（千島や沖縄など広く各地をまわった）としても知られた人だが、自分にはきびしく、何ごとも率先して実行する高潔な人だった。

嘉七は、その人柄にうたれたのである。

△笹森先生こそ、私の手本だ——▽

と、嘉七はここに決めた。

朝はやくから、夕方くらくなるまで——農場の作業は、きびしくつらかったが、嘉七は、よろこんでそれにあたった。自分をためす、またとない機会だと思ったからであった。

農牧社ではたらいたのは六年間だったが、嘉七は、別人のような人間的成長をとげたのである。

こうして農牧社をやめ、村に帰った嘉七が、さっそく手がけたのは、リンゴづくりだった。嘉七の信条は、△リンゴをつくるには、まず人をつくる▽ことだった。

それは、笹森からうけた教化と、農場で体験したことから見出した、彼の人生哲学ともいうべきものだった。

さて、家に帰ったものの、はじめは、苦しい生活を支えるために苗木の販売をしたが、やがてリンゴ栽培に没頭する。

栽培をはじめた嘉七は、さまざまな障害に直面した。

何よりも大きかったのは、ワタ虫やシンクイ虫などの害虫のほかに、花腐れ、実腐れなどの病気が大発生して、リンゴづくりはピンチに立たされたときである。

一八九七年（明治三十）から一九〇七年（明治四十）にかけて、それも一度や二度ではなかった。

「このままではリンゴは全滅だ。」

生産者は、悲嘆にくれた。

しかし嘉七は、リンゴの危機を、みごとにのりきったのである。彼が生産者にすすめたのは、袋かけと、くすりかけだった。

嘉七が、リンゴ栽培でとねたのは、リンゴ園を整備し、地力をつけることだった。

それによって、すぐれたリンゴが生産できるからである。

嘉七は、合理的な剪定のしかたを工夫した。

それまでは、リンゴの木の枝をすべて三段づくり四段づくりなどの階段形仕立てが行なわれていた。だが、これだと立派なリンゴづくりはおぼつかない。

嘉七は、リンゴの木を前にして考えた。△上枝があるから下枝がある。上がなければ、下もないはずだから、上枝をとれば、二番目の枝が上枝になるわけだ▽

彼は、一人つぶやきながら、見ごとにのびた枝を地面から一段目のところで、ずばりと切りおとしてしまったのである。

これは、今までにない、まったく無謀ともいえる剪定のしかただった。

枝を切り落とされたリンゴの木――。

残った一番上の枝の先には、わずかに葉がついているだけの、ぶざまなかつこうだ。

リンゴづくりの仲間も、それを見てあぜんとした。

「嘉七は狂った――。」

「これでは、リンゴの木を殺してしまう。」

うわきは、村から村へひろまった。が、嘉七は、そんなうわさには耳もかさなかつた。

彼が期待したのは、切りおとしたところから出てくる、新しい枝（徒長枝^{とちようし}）だった。

はたして、年があけると、徒長枝がのびてきた。

「これを、育てるんだ。」

嘉七は、伸びた徒長枝を、一本のリンゴの苗木と考えて育てていった。これが成功した。やがて、見ごとな枝をつけ、たわわに実がなったのである。

「たまげたなあ。」

「立派な実がなって……。」

「やっぱり嘉七は、リンゴの神様だよ。」

噂は、またひろまった。

嘉七が工夫した一段式の剪定法——これが、現在の剪定のもとになっているといわれる。

△青森県のリンゴを発展させるには、敵をつくることだ▽

嘉七は、リンゴ栽培の抱負をこのように語っている。何事も、満足しきってしまえば進歩はない。それと同じように、リンゴの栽培もたがいに競争しあう相手があつてこそ、研究がなされ進歩発展する、という意味である。私たちの生活でも、味わうべき言葉だといえる。

(敵というのは、競争しあう相手のことである。)

青森県のリンゴ栽培に、大きな足跡を残した嘉七は、多くのなかまたちに見とられながら、六十三歳で生涯をおえた。弘前市樹木二丁目に、嘉七の功労をたたえる碑が立っている。

参考文献

波多江久吉編『青森県のりんご産業』一九六二年（昭和三十七）青森県りんご協会
斎藤康司『外崎嘉七』「郷土の先人を語る(5)」一九六七年（昭和四十二）弘前市立図書館

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、四八・六〇頁